

追加

無一庵奇零

溢團扇昔堅氣の主人かな

夏深し砲臺のわと草生ひて

汗拭きつ互に避暑の話かな

夕納涼燈明臺の徹白さ

夕涼し音樂堂に耳洗ふ

短歌募集

▲課題、隨意 ▲締切、毎月末日、▲發表、本誌上

▲賞品、三光に粗景 ▲撰評、眞宮起雲

▲投稿 用紙隨意左記の處に送らるべし

伊勢國河藝郡稻生村 みどり短歌會

○當撰發表

(天)古今歌文書綱要一部 京都櫻井 芳野君

(地)雪月花一部 伊勢白浪 子君

(人)作歌自在一部 紀伊千仗喜美子君

短歌

起雲選

五十

(天)

京都 櫻井 芳野

やせく／＼て世を憤はる我ともと見れば興ある夏

菊の花

(地)

伊勢 白浪 子

朝風にわはれ露ちる白蓮の清さをうたに此世終

へんか

(人)

紀伊 千仗喜美子

ぬげ落ちし黒髪詩集にそと秘めてそゝろ心地に

秋の雨さく

◎

小林 波香

夕雲に思ひこらせて瘦せし身のかくれ髪寒し初

秋の風

はろく／＼と木犀かをる築山に匂ひこめたる夕月

のかげ

◎

伊藤 敏

露重き芙蓉の蔭に身を寄せて詩集繙く歌心地か  
な

時の魔がさざむ針の音身に泌みて成すこともな  
く又秋は來ぬ

◎

かほる

思ひありて獨さまよふ夕野原鐘のひびきに露皆  
こぼる

白菊や我世に榮えよ身に榮えよさはれ真白の色  
永久にして

のり合ひの渡し小舟に若き尼が宿世語らふ秋の  
夕べや

◎

玉 子

黒髪のみどり五尺を供へたる盆燈籠に秋の風ふ  
く

夕月にわがさまよひの袖ぬれぬ桔梗榮あり瑠璃

玉の露

◎

千仗喜美子

賣られ來てうつらゝの廓住まいわゝ秋風の胸  
いたましむ

◎

花 月

朝庭に薄紅の花芙蓉化粧の水をそゞぎても見し  
美しくしき天の逢瀬をうたにして祝ぎまつらんか  
七夕の宵

◎

清 水 壽

夕風に袂ふかせて尋ねたる人はいませさす夕顔の  
咲く

◎

吉野 絹子

酒くみて冷麥すゝる竹椽に芭蕉葉越しの月美く  
しさ

しさ

大森 蝶子

山寺に百日紅の色あせて夕日斜に日ぐらしの鳴

◎ 眞宮 起雲

野に立ちて歌に倦みたる手すさびよ秋の七草花  
環にぬかむ

秋の夕べ無心に動く雲の影を君語らずや興清か  
らむ

花に狂ひ月に悶えの興も倦みぬ沈黙の君よ我を  
召しませ

戦場の斷腸

林 天然

天奪高く星滿ちて  
數十餘りの天幕は  
樹々はまばらに霞たち  
軒をつらねて引張られ

篝火點々明滅し  
こゝは何處ぞ遼東の  
萬籟音なくしづめるに  
こだかき丘を辿りつゝ  
腕くみ合はせて座せる時

二

世にます人は多けれど  
老ひたる母はたゞ獨り  
エすがもすべも共白髮  
國の爲めとはいひながら  
うしや門出の其際に  
母上暫し寂しさを  
即歌の聲を聞きませと

三

世界の歴史に我國の  
忍ぶ恨みは十餘年  
時機は來れり敵露西亞  
腕のつゝかむ其限り  
敵の滅ぶるそれまでは

駒は嘶く廣野原  
王師の屯す野營なり  
年猶若き士官あり  
歩む姿は雄々しくも  
丈夫の涙誰か知る。

果敢なきものはわれのみか  
寄る年波はいや増すも  
便りすくなの身の上や  
思へば永劫の生別れ  
笑もて涙うちはらひ  
耐へたまひて恙なく  
いひしも今はあだなれや、

御稜威示さむ時までと  
日本健兒の奮ふべき  
千歳一過げにこのとき  
向ふ奴原斬りまくり  
生きて還らぬ覺悟なり